

## 「職業コンペの奨励」

### 進路指導部

ジョブコーチという名称が世に浸透して十数年になります。昨今、急激に各地でジョブコーチ（現状資格取得が定められていない）が多数養成されています。

養成講座では、歴史的背景として発祥の地である米国バージニア州で1920年より戦争による傷痍軍人の働きたいという気持ちに応える措置や欧米諸国の福祉に対する考え方の違いについて理解を深め、個々の状況に応じて個別支援計画を打ち立てて実行していくことの必要性が説かれています。また、本来ジョブコーチは「職場内」「職場開拓評価」「遠距離」の3分野で別の者が担当し、カウンセリングとコーディネイトもそれぞれ専任の者が行っているそうです。しかしながら、米国の成功例の一つであるジョブコーチの実践をそのまま真似る日本は、その質がまだまだ劣っていると云わざるを得ません。これは、複雑な事柄を少人数で行い、すぐにその成果を求める体勢にも起因しているのではないのでしょうか。

ただし、現状日本に欠けている健常者と障害者の自然な交流に対して、各地で東奔西走しているジョブコーチが、一石を投じていることだけは間違いありません。すべてはここから始まるという意味においても、社会の意識改革こそが、課せられている使命の本流という点では我々も同感です。

しかし、現状、我々が職場とのつながりを考えた時に、コーディネイトと3分野のジョブコーチを切り離して考えることはできません。職場の方々は分からないことだらけで、出来ることならば、専門家に全て任せたいと感じつつ、あまり堅苦しくはなあって欲しくないという複雑な感情をジョブコーチに期待しているからなのです。ジョブコーチによってはその対応がまちまちであるように、人には明らかな力の差があります。ですから、ジョブコーチばかりでなく、社会自立を考える障害のある方、職場の方々にも例外なくこの考えは当てはまる訳です。では、どうすれば良いのでしょうか。そこで我々は「ハンデキャップを上手に捉えて、力の差がある者同士が、対等な気持ちで楽しむことができ、且つ真剣になれる身近な事柄がないか」と考えてみました。例えばゴルフはいかがでしょう。ゴルフコンペで与えられるハンデキャップには上限があり、全ての競技者はこれを得ることで特別な感情を持たずに、対等な気持ちでゴルフに打ち込むことができます。職業においても、ハンデキャップに対する発想の転換さえできれば、力の差がある「人」と「人」が自然に関わり合えるのではないのでしょうか。皆さんで、職業コンペをひろく社会に奨励していきませんか。